

# 学校図書館との協働を軸とした「情報活用力」への働き掛け

東京学芸大学附属世田谷中学校 渡邊 裕 村上恭子

キーワード：「情報活用力」 授業と学校図書館 協働

## 1. 問題の所存

この「情報活用力」の育成は、現在の教育現場において重要な観点のひとつである。この点については多くの実践報告や研究がなされてきている。

しかし、学校図書館との協働または学校図書館の活用という授業実践を見ていく中で、その効果の連続性・重層性に目を向けてたもの（またはそれを示したもの）は少ないのではないかと感じることもある。また、他の場面での応用性について考えるための指標の把握が難しく、活用されきっていないということもあるのではないか。

たとえば、図書館側からの発信では、図書館を用いることで培われる、または顕在化する「スキル」や段階の提示にとどまっているものが多い。けれども「情報活用」を行う主体である児童・生徒については、「スキル」を身につけることが主目的ではないはずである。

「スキル」を抽出することができるということは、それを活用することで得られるもの（目的）や、養うべき「力」が存在することが想定される。それぞれの授業においては、それらをどのように養っていくか、その過程に「学校図書館の活用」という方法の選択がなされているであろう。よってこれまでの多くの授業実践や研究においては、ある単元の中での学校図書館の活用方法や効果が示されてきた。しかし、汎用的・横断的な「力」への着目や蓄積という点からのさらなる分析の必要性も感じられる。

そこで本稿では3年間を通じて、一つの教科だけでなく、いろいろな場面で図書館活用・資料活用についての経験を重ねてきた生徒たちが、それらの力がある場面でどのように活用していくのかを見たい。そこで、「情報活用力」という視点から学校図書館の協働に関わる観点を明示したモデルを作成し、その「蓄積」に目を向けた授業実践についてまとめていく。

「情報活用力」については、「蓄積」をいかに活用することができるかが重要な点の一つである。そのためには、前段階として「蓄積」の中から目的にそったものを「参照」することが必要になる。さらにそれらを「顕在化」する経験を繰り返していくことで、「力」としての定着を図ることができるだろう。

さらに「蓄積」に関しては、「自己内蓄積」だけでなく、例えば図書館や書籍が持つ空間的蓄積も想定している。これらのつながりを考えていく上で、「情報」を形作る「ネットワーク性」ということも捉えていかなければならない。

ここから見えてくるのは、情報活用にあたって、資料の性質（メディア特性）を踏まえた活用の仕方を考えることの重要性である。「情報活用力」の背景には、複数資料の活用に加え、「比較」という思考操作があるだろう。この点から、授業実践のなかではICT活用や協働についても考えていきたい。

## 2. 「情報活用力」とその活用

現在求められる「力」として、たとえば『教育課程企画特別部会 論点整理』（平成27年8月 中央教育審議会 初等中等分科会 教育課程部会 教育課程企画特別部会）の中から次のようなものを見ることができる。

これからの子供たちには、社会の加速度的な変化の中でも、社会的・職業的に自立した人間として、伝統や文化に立脚し、高い志と意欲を持って、蓄積された知識を礎としながら、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことが求められる。

(傍線筆者、以下同)

ここから次のような段階を見ることができる。

- 1) 伝統や文化に立脚
- 2) 蓄積された知識を礎としながら、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断
- 3) 自ら問いを立ててその解決を目指す
- 4) 他者と協働しながら新たな価値を生み出していくこと

ここで示されるような「力」を養っていくひとつの場として、学校図書館の存在が考えられる。

近年、学校図書館のあり方についても、たとえば「メディアセンター」のような役割を担う場所など、「使用すること」による成果に着目したものが示されていることから、特に「蓄積された知識を礎としながら」や「自ら問いを立ててその解決を目指す」という点についてはその特徴と結びつきが強いといえるだろう。

それはたとえば2004年4月1日 全国学校図書館協議会が制定した「情報・メディアを活用する学び方の指導体系表」や図書館活用や「探求学習」に関わる書籍などさまざまな形でまとめられている。しかしそれらは、やはり方法的な観点からの分析が多く、そこから得られる汎用的な「力」とその活用の可能性を考える必要がある。

この点からの働きかけとして受け取ることができるのが、「伝統や文化に立脚」という「文脈性」への意識付けや「主体的に判断」、「他者と協働しながら新たな価値を生み出す」といった視点であり、その活用の「場」を設定／想定し、具現化できるのが授業という「場」であろう。

現在の学習指導要領の特徴として指摘されるのが、次のような点である。

国語科においては、実生活で生きて働き、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること、我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てること等に重点を置いて、現行の学習指導要領に改訂され、その充実が図られてきているところである。(同『論点整理』より)

さらに次のような課題も提示される。

伝えたい内容を明確にして表現したり、文章の内容や形式等を正確に理解したりすること、課題を解決するために、必要な情報を収集し的確に整理・解釈したり、自分の考えをまとめたりすること、古典を学習する楽しさや学習する意義の実感等については、更なる充実が求められるところである。次期改訂に向けては、幼児期に育まれた言葉による伝え合い等の基礎の上に、小・中・高等学校教育を通じて育成すべき資質・能力を、三つの柱に沿って明確化し、古典も含む我が国の言語文化に親しみつつ、言語活動を通じて課題を解決する能力や、情報活用能力の育成、現代の文化・社会の在り方や日本人としての生き方等にもつながる古典の学習の充実、他者と異なる新たな考えや価値を創出し表現する活動の充実などを、各学校段階を通じて図っていくことが求められる。

(同『論点整理』より)

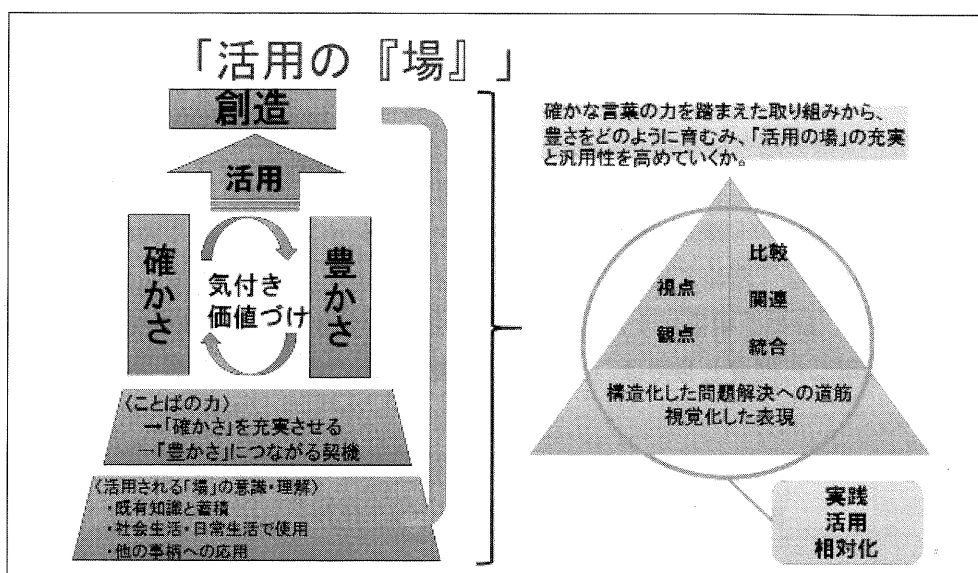
国語という教科で取り扱う対象は、様々な学習の基盤となる「ことばの力」に結びつく。また、「情報」を「活用」する際に用いられるものも「ことば」である。

ここで培われる「力」は場面を限定されるものではない。また「協働に関わる」ものは汎用的に活用できなければならない。これは、国語学習での「基礎的な学び」が発揮されることや、「情報活用力」について「日常との接合点」という視点からの関わりを考えていくことにもつながっていく。

これを踏まえ、「情報活用力」については「『蓄積』をいかに活用することができるか」という点からの連動性の重要性が指摘できる。また実際に活用の場面を考えていくときには、それぞれでなされる事柄について、「蓄積—参照—可視化（アウトプット）」ということの充実を図り、働きかけを明確にする必要がある。特に蓄積については、個人内の蓄積とともに、例えば図書館自体の充実などに表れる空間的な蓄積についても注目したい。

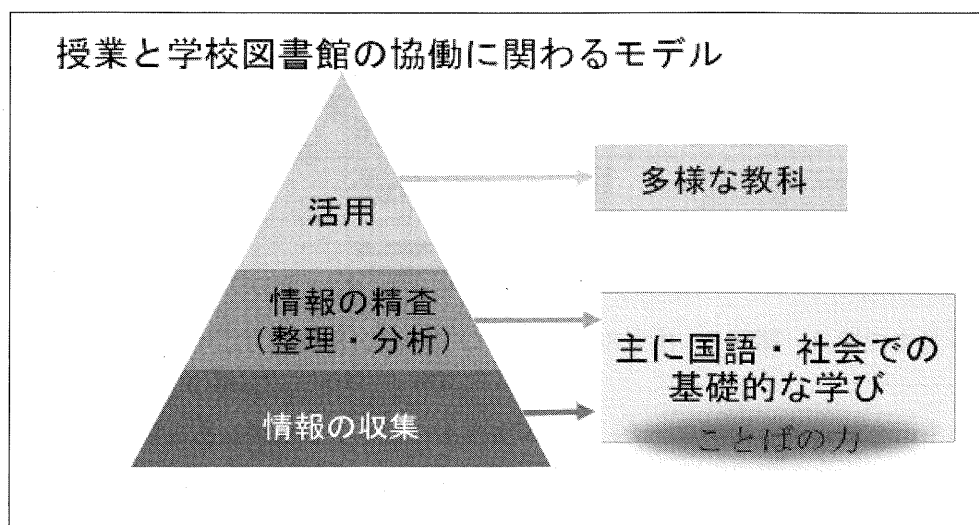
このようなとき、「情報」を形作る「つながり」への着目ということが重要になる。特に対象を「情報」としてみたとき、その活用を図るには、複数資料の「比較」という思考操作、資料の性質（メディア特性）を踏まえた活用という点に留意しなければならない。

また、「活用の場」については本校国語科の研究を踏まえ、次のように整理した。



### 3. 授業と学校図書館の協働に関わるモデル

このような点を踏まえ、学校図書館との協働について、授業の中で養われる「力」に関わる観点を、次のように整理する。



この図で整理したものは、上位概念というわけではなく、児童・生徒の触れる表出した「情報」量をもとにしたものであり、これが従来示される「力」に関する高まりを構造化した螺旋構造の図と異なる点である。螺旋図による構造化はもちろん、繰り返しということも想定されているが、「高まり」ということの意識付けが強くなってしまふことも懸念される。この図で示したものはまた、顕在化した「情報との向き合い方」でもある。

「力」の高まりを段階的に整理するのではないことから、授業での活用について、個々の目的に応じ情報量の差異から働きかける部分を整理することができる。多くの場面で往還的に培われることで、「活用」の点からは熟達化、またカリキュラムや単元の活動の位置づけを整理していくことで、活動として培われる「力」の「蓄積」を可視化することができると思う。

また、これまで示されてきた「スキル」や方法については、「収集」「精査」「活用」いずれかの段階に限定されるものではないこともわかる。それぞれのツールが持つ特性に着目し、その効果や働きかける部分ということをさらに焦点化できることも期待できる。

この積み重ねにより、「情報活用力」の育成につなげることができるのではないだろうか。

## 4. 授業実践

### 4-1 対象生徒について

本実践は平成 27 (2015) 年 6 月に「平成 27 年度 学校司書資格・養成の在り方や資質能力の向上等に関する調査研究」授業実践として行った。

対象学年は中学入学から授業者が受け持ち、中学 3 年のこの実践までにマッピングや発表活動、ポスターセッション、タブレット端末を活用したプレゼンテーションなどを取り入れた授業を行っている。また、文章などにある「情報」にどのように向き合い、自分の考えに接続していくかということを問い続けた。さらに、根拠を明確にすることや資料の扱い方も段階的に課題を提示し、取り組んだ。

また、図書館を活用した授業としては、下に示した表のように、多くの場面で学校図書館を活用している生徒である。

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年
国語	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業
社会												
理科												
体育												
音楽												
美術												
外国語												
総合												
その他												
学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年
国語	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業	「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業 「国語の基礎力」を高めるための授業
社会												
理科												
体育												
音楽												
美術												
外国語												
総合												
その他												

中学 3 年 6 月まででは、国語 9、社会 8、家庭科 6、音楽 1、保健体育 1 (いずれも単元数) が行われている。

この点からも、方法論的なアプローチ、また図書館を「使う」状況にもある程度の意識付けが図られている。また、「情報活用」という点から考えても、一つの場面に限定されず、多くの「日常との接合点」や「活用の場」が設けられ、それらが有機的に結びついていると考えられる。

## 4-2 学習の全体

学習の全体は次のような形で計画した。

次・時	ねらいと学習内容	学校図書館・情報活用
0 (単元の 前の積み 重ね)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『万葉集』に関わる知識・理解 ※修学旅行での「万葉歌碑」を見つける活動</li> <li>・説明文「『批評』の言葉をつめる」</li> <li>・テーマ別読書(読書記録カード)</li> </ul>	<b>図書館協働</b> <b>授業に関わる資料の補強</b> 公共図書館や他所属図書館からも資料を借り受け 万葉集のコーナーを図書館に設置
<b>第一次 経験を活用し、「批評」のための要素を明確にする</b>		
1時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『万葉集』の中から任意の一首を探す <b>内省／一般的な評価(スタートとなる一つの情報)</b></li> </ul>	<b>図書館協働</b> 万葉集のコーナーを図書館に設置
2時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「批評」の前段階における「感想」を記録する。</li> <li>・相互交流をもとに、中心とした「視点」を明示する。</li> </ul>	
<b>第二次 「批評」を考える : 「情報」の収集と資料の活用(デジタル・アナログの選択/融合) : 背景にあるものにも目を向け、歌を捉え「批評」につなげる。</b>		
3時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「批評」に関わる歌の「要素」について調査する。</li> <li>・「要素」をもとに「感想」の「理由」を明らかにし、「批評」につなげる「根拠」を補強するための調査を行う。</li> </ul>	<b>情報活用/図書館協働</b> <b>関連項目に関する本の別置</b> <b>思考整理に関わる本の別置</b> <b>一情報源に関わる注意事項の再確認</b> ・これまで学習した方法をもとに、方向性(「要素」)を定めた上での調査を行う
4時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調査をもとに、「批評文」のプロットを考える。</li> <li>・情報の選択や追加調査を行う。</li> </ul>	<b>調査に当たっては随時教員や司書に相談しながら</b>
<b>第三次 「表現・伝達」のために：視点を明確にし、共有の観点をふまえ自らの考えを表現する</b>		
5時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「批評文」を書き上げるとともに、「見出し」の効果を考える</li> <li>・「批評」をもとに「視点」を明確にしたうえで、同様の観点からの「おすすめの本」を選び、紹介する。</li> </ul>	<b>読書経験/図書館協働</b> <b>「見出し」について、書籍を例にその役割と効果を確認した上で、推敲する。</b>

また、それぞれの時間についてその内容を整理してみる。(下線:「力」として示した事柄)

### 【0時】：蓄積(体験の活用)

- \* 修学旅行の「体験」
- \* 説明文で得た「批評」という観点
- \* 「万葉集」に関わる知識・理解
- \* 読書経験

### 【1・2時】アウトプット・「見える化」

- \* 任意の歌の選択
- \* 「感想」
- \* 分析

### 【3時】抽象化・つながりを見出す

- \* 構成・展開の検討 → 交流、推敲
- \* 「『批評』の言葉」での表現

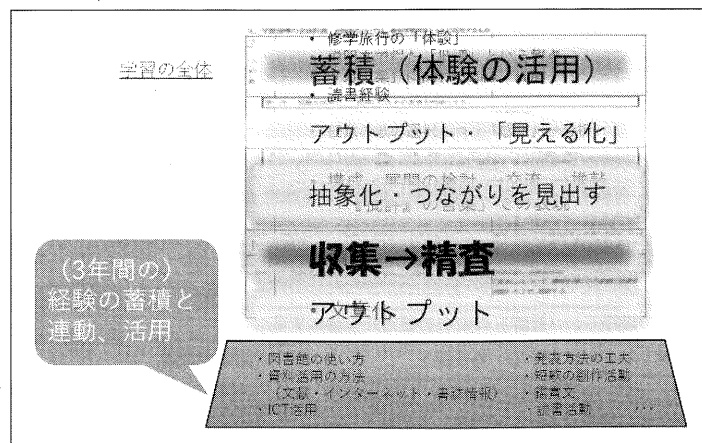
### 【4時】収集1精査

- \* 調査、情報の選択

### 【5時】アウトプット

- \* 文章化
- \* 「見出し」の効果を考える

これらの取り組みについて、この単元のみで行うのではなく、3年間の経験の蓄積(個人内蓄積/空間的蓄積)と連動し、活用を図っている。このような、往還的な活用を図ることが重要であると考え。



#### 4—3 単元の提案と可能性

今回の単元では、「経験を活用し、視点と根拠を明確にすることを通じ、表現の多様性を意識化する」ことを目標とした。これは、3の図では「収集」から「精査」に当たる部分を中心とした取り組みである。

また、「精査」については、次のような視点から具体化していた。

- ・学習内容や経験（本単元では修学旅行が大きく影響する）を単独で理解するのではなく、それらの結びつきを活用することでの学習効果を期待する。
- ・随筆や説明文の学習から得た「言語」に対する視点と『万葉集』という古典世界と現代的な感覚の接点を作り出すことで、相違点・類似点を発見、そこから理解を深めることを目指していく。
- ・「批評」という一つの定義をもとに、資料の活用や交流活動を通じ、「理由」「根拠」の違いを含め、伝達効果ということへ目を向けていく。

このように、「収集」から「精選」に当たっては、「自分の考え」の輪郭を捉えておく必要であった。そして、とらえた輪郭を具体化し、補強していく上で効果的な事柄が「アウトプット・可視化」である。

自分の思考を「見える化」し、また実際に動かしていくことで、新たなつながりを見出していく様子が見受けられた。またそれぞれの段階では、ワークシートや付箋に加え、複数色の名刺カードやミニルーズリーフなどの、ツールの活用が大きな力を発揮した。それにより、各々の「蓄積」を土台とした「交流」など協働の効果を高めたといえることができる。

さらに先でも示したように「情報活用力」の背景にあるのは、複数資料を比較し、取捨選択、意味づけを行う過程である。資料を比較する上で欠くことができない部分として、その資料が開かれる「場」への視点である。インターネットや書籍など資料について、その「情報」が持つ長短について、メディア的な特徴を意識し、使い分ける（今回の授業では、「精選」が進むにつれ、インターネット上の情報から離れていく）様子も見られた。ここから、それぞれの段階での「情報」への入り口となる仕組みそのものに目を向け、その特徴を生かすことにもつながっていった。

また、今回の実践の効果として具体的には、資料の特性を踏まえた上での「自分の考え」と「根拠」、「引用や参考」といった部分での変化が大きくあったと考える。

#### 5. 考察 「情報活用力」とツール活用の視点

図書館活用において、「力」に注目すること、またツール・スキルの活用ということから考えてみると、汎用性の獲得や応用可能性の提示ということにもつながるものである。それにより、場所に限定されない取り組みにもつなげることができる。

学校図書館にせよ ICT 活用にせよ、そこで行われるのは、従来の学習を活用・発展させることであり、それらの「ツール」を活用することで、より効果的な学びが創造されるということであろう。

そこにあるのは、活動そのものはたとえば他の方法でも可能なことについて、教科の学びを根底とした、「使うことでなににつながるのか」ということを意識化した取り組みである。そしてまた、習熟することでの可能性の拡大、「活動の充実」、「『これから』の可能性」、「共同性の高まり」という点からの働きかけにつながっていく。

また「情報活用」にあたり、「蓄積」とその活用を中心にみると、継続性や段階的な取り組み、多くの情報に触れることでの可能性を改めてみることはもちろん、空間的要因や人的要因という面も見えてきた。

このようなことをさらに具体的にとらえていくためには、生徒の学習意欲を高めていく取り組みは不可欠である。それには、従来の研究や実践の積み重ねとともに、社会的要請への呼応や環境デザインなどの視点を導入していくことも重要である。

このような点も視野に入れながら、今後は資料の性質（メディア特性）を踏まえた活用の方法といった点からも、協働や「情報活用力」について実践を通じ考察を深めていきたい。

※本稿は第 131 回全国大学国語教育学会東京大会 自由研究発表（2016 年 10 月 15 日）で行った、「中学校国語科における「情報活用力」への働き掛け—学校図書館との協働を軸にした取り組みから—」をもとにしている。